特定非営利活動法人
アジア・アフリカと共に歩む会
南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

TAAAの活動日誌　2017年

・2017-11-30 農業塾でニワトリを飼い始めました
・2017-10-03 2017年8月（12日～20日）現地プロジェクト訪問報告 その4　最後に南ア訪問こぼれ話
・2017-09-29 2017年8月（12日～20日）現地プロジェクト訪問報告 その3　過疎地の誇りあるリトルファーマーたち
・2017-09-18 2017年8月（12日～20日）現地プロジェクト訪問報告 その2　居心地も良く芸術性溢れる図書室
・2017-09-03 2017年8月（12日～20日）現地プロジェクト訪問報告 その1　算数セット授業
・2017-07-29 7月15日TAAA講演会レポート
・2017-07-20 南アフリカでTAAAのボランティア活動に参加して得たこと
・2017-05-31 地元文化を醸し出す生徒たちの図書活動
・2017-04-29 先行プロジェクト卒業生菜園グループと繋がって
・2017-03-29 バンギビーゾ小学校訪問
・2017-02-27 有機農業塾の開校式典
・2017-01-15 保育園で菜園活動が始まりました

2017-11-30　南アフリカ

農業塾でニワトリを飼い始めました

農業塾でニワトリを飼い始めました。エナレニ農場で育てられたKoekoek（クークック）は南アで交配された鶏で、お肉がおいしく、卵の質もよく、きれいな羽も利用できます（飼い始めるとしめるのはつらいですが）。Koekoekはおとなしく賢い鶏で、夜は鶏舎の中で寝ますが、昼間は敷地内を自由に走り回っています。

鶏舎の建設やマニュアル作成等の準備が整ったところで、11月7～9日と13～15日に養鶏トレーニングコースを開催し、有機農業コースの卒業生19名が参加しました。3日間のコースでは自然養鶏（半放し飼い）の例としてKoekoekの飼育方法を指導し、またブロイラー鶏の飼育方法の講義も行い、違いを理解してもらいました。

ブロイラー鶏舎も建設しましたが、少し前に鳥インフルエンザが蔓延したことからいまだに飼育が制限されています。ただ、ブロイラー鶏の飼育にはコスト（餌や予防接種等）と労力（常時鶏舎の管理が必要）がかかり、小規模では収益を出すことは難しそうです。菜園と同様、Koekoekはオーガニック、ブロイラー鶏は大規模商業用という感じです。

農業塾には現在雄鶏2羽、雌鶏4羽がいて、年明け位には卵を産み始めるとのことで楽しみです。クリスマス休暇中は農業塾が閉まるので、地元のスタッフの家で預かってもらうことにしました。

（TAAA南ア事務所　平林）

Page Top ▲

2017-10-3　南アフリカ

2017年8月（12日～20日）現地プロジェクト訪問報告
その4　最後に南ア訪問こぼれ話

学校図書室で話し込んだ司書教員だけでなく、当会支援プロジェクトに興味を示した現地のアフリカ系の方々何人かに、日本の教員との交換・交流計画などはないのかとか、日本で研修できたらきっといろいろ学べるのにといった日本、特に教育分野への期待を聞かされ、今日本社会、教育政策、学校現場からは反面教師的にしか学ぶことはないことを分かってもらうのに苦労しました。 一方宿泊先だったロッジのオーナーの白人女性とは、3日目朝ベッドサイドテーブルに 「連泊客の私に石鹸など洗面具の機械的追加は結構です。資源節約のために！」 と私が残したメモをきっかけに話をするようになり、プロジェクトについても聞かれて図書室と菜園作りだと話すと、 「食べ物と本は何よりも大事ね。私も食べ物と本さえあれば生きていけると思うわ」 と話がはずみ、アパルトヘイトによって奪われ続けてきた人たちの飢餓感をあらためて実感させられました。

しかしこのアパルトヘイトとの闘いの中で、そしてさらに絶対的貧困との闘いの中でこそ培われてきたと思える区レベルの常設のWar Room （戦略室）なるものの存在を知り、やはり南アからの学びは欠かせないと思いました。それは、ベキシズウェ小学校の校長さんとの話の中で出てきたものです。 「省をまたがるような問題、当該省の役所がちっとも取り組んでくれない問題を地域が抱えたような場合は、War Roomへ持っていって、そこ（構成メンバーがどのように選ばれるのか訊きそびれてしまいましたが、政府関係者、民間団体、酋長、校長、宗教関係者、一般住民からなっているようでした）で話し合って解決策を練り、タスク・チームが関係者と連絡をとりすぐ解決に動き、モニタリングも行う。私もそのWar Roomのメンバーなのよ。今度シポンギーレ（プロジェクトマネージャー平林さんのズル名）にもオブザーバー参加して欲しいわ」と。例えば、ある子どもがAIDSを病む父親のＤＶに苦しむ母親を抱えて学校に来れないでいるという事態を察知したら、そのことを、本人でも、近所の住民でも学校でもこのWar Room に持ち込んで、議論の俎上に

のせて、いろんなところを巻き込んで解決にむかって協力するというしくみだというのです。 私的な問題から公的な問題まで、持ち込めるようなのです。市役所、福祉事務所、保健所、教育委員会をたらい回しされたり、加害当事者による隠蔽や関係者の事なかれ主義、～いじめ問題特別調査委員会の設置・審議待ちで解決が遠のきがちな日本の現状では考えられない仕組みですが、常設のWar Roomは、地方分権、直接民主主義、住民自治の貴重な仕組みの一環として検討の余地があるのではないでしょうか。

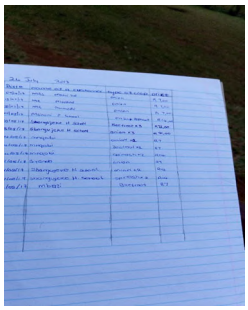
以上南アの人たちの苦しみの深刻さと豊かな知恵にも出会えたという追加報告でした。

（大友）

Page Top ▲

2017-9-29　南アフリカ

2017年8月（12日～20日）現地プロジェクト訪問報告
その3　過疎地域の誇りあるリトルファーマーたち



2016年7月より実施中のJICA草の根技術協力事業「有機農村塾を拠点とした農村作り」は、クワズールーナタール州ウグ郡ウムズンベ自治区内の2地域で行っています。ウムズンベ自治区を地形的に分けると、沿岸部、山間部、山岳部からなりますが、さとうきび畑が広がる山間部のコロコロ地域と山岳部で過疎化が進んでいるトフェット地域が事業の対象地域です。

トフェット地域に足を運ぶと、一種独特のゆったりとしたやさしい空気に包まれます。　この地域も他地域と同じく仕事がなく、多くの住民は家族の老齢者の年金に頼って暮らしていますが、小動物やイノシシの狩りが行われ、また細々とですが豆類、芋類、トウモロコシなどを栽培している家庭も多く、比較的自給自足度の高い地域といえましょう。

最初の訪問先はトゥルベケ小学校。　先行JICA草の根事業の「学校を拠点として有機農業のモデル地域作り」では、優秀校の一つに選ばれるほど、菜園活動が盛んです。学校で菜園技術を学んだ生徒たちは、家庭菜園を始めるなど、文字通り学校を拠点に生徒たちがリーダーとなって、地域に有機農業技術を普及してくれました。　現行事業では、生徒たちの保護者に本格的な有機栽培技術を教え、親子による家庭菜園をさらに普及しています。親子といっても多くの生徒は親が不在で祖母に育てられているので、「おばあちゃんと孫による家庭菜園」の方が正確です。

学校菜園を訪れると、休み時間の生徒たち何人かが水やりなどの世話をしていました。　生徒全員が参加しているという立派な菜園です。「協同組合を作りました」と数人の生徒が近づいてきて、苗床を披露してくれました。自分たちで苗を育てて、地域住民や教師に売り、収入は設備充実

のためにと学校に寄付するのだそうです。しっかり書かれた帳簿まで見せてくれました。　彼らが大人になったとき、この地域の有機菜園はどのように広がっているのだろう。とても楽しみになりました。

山々が連なるのどかな風景の地域ですが、ここ数年、多少余裕がある住民は、少し開発が進んできた沿岸部へと移住するようになったため、過疎化が進んでいます。少しでも就職のチャンスがある地域へ、少しでも豊かな地域へ、と移ろうとする流れを止めるのは難しく、トゥルベケ小学校でも、すぐ隣になるシボングジュケ高校でも、生徒と教師が激減し、校長は頭を抱えている状態です。

移住する余裕のない住民たち、生徒たちの間には、ある種の「取り残された感」があるかもしれません。このような地域だからこそ、有機栽培技術は、人々の生活を支えていく大きな力になり、また精神的な支えにもなると思います。トゥルベケ小の生徒たちは、誇りあるリトルファーマーとして、学校と地域で有機農業を普及し根付かせています。彼らは、地域の大人たちに、菜園技術を伝えるだけでなく、菜園活動を通して、地域のよさや可能性も伝えているのではないでしょうか。

（久我）

Page Top ▲

2017-9-18　南アフリカ

2017年8月（12日～20日）現地プロジェクト訪問報告
その2　居心地も良く芸術性溢れる図書室

少なくとも今回訪問できた18校（30校中）の図書室の3年前とは見違えるような変化は、蔵書の増冊に加えて、重宝されていることが分かる空気感でした。

増冊は、日本から届いたものだけでなく、TAAAのオフィスから車で40分近く南に下ったところにある現地唯一のショッピングモール内にある本屋で平林さんがスタフと一緒にみつくろって購入してきたもの、そして、州教育省図書部門のELITSから配布されたものによりました。 訪問した複数の高校では、図書委員と図書司書から、もう少し易しめの読み物（小説）と辞書（英・英とズル・英の両方）が欲しいと、小学校では、薄くて小型で字の大きい本がもっと欲しいと言われました。 日本でももう少し頑張りたいですが、このショッピングモール内の本屋（学校で必要とされているような読み物類がバーゲンにもなっていた）の第1位のお得意さんの座をTAAAからELITSに譲れる日ができるだけ早く来くるように、教育省にさらに働きかけていく必要を感じました。

図書室では、TAAAスタフによるPC基礎講座がおこなわれていたり、理科の担当で図書司書でもある教員が、参考書を紹介でき、本に囲まれた環境に慣れてもらいたいとの思いで、自分の授業を図書室で行っていたり、生徒が共同発表の作品を作っていたり、一角で百科事典を使って黙々と宿題をやっていたり、脇目もふらずに読書に耽っていた男子が、司書の教員に「あんたは本をたくさん読んでるけど、ブックレビュウが一つも出ていない」と文句を言われていたり、近所に住む本好きな保護者がボランティ

アで蔵書登録・書棚整理を手伝いに来ているなど、有意義な使われ方を目の当たりにし、学校内の文化的拠点のような役割を果たしている図書室が少なくないことが確認でき、これこそ図書支援が各校の持続的努力で地についたものになりつつある証として評価できるのではないかと思いました。

まだ整備の余地がある学校もありましたが、幾つかの学校では、図書司書や図書委員会のメンバーが、その個性的な芸術性を発揮して、壁、棚、窓、カーテン、ドアなどに図書室らしい創作物をあしらって、思わず見とれてしまうような観賞し甲斐もあり、居心地も良い素敵な空間に仕立て上げていました。司書免許を持つTAAA図書スタフのントコゾさんは、各校の図書司書や図書委員会には、「子ども達が入ってきたくなるような、入ってきたらいつまでもいたくなるような空間にしよう」と声をかけていると熱く語ってくれました。

菜園プロジェクトの一環として元学校を使って設置されていたリソースセンターで、高校生が調べものをしていたり、TAAAスタフからPC作業の手ほどきを受けていたり、コピーサービスを受けるために列を作っているのを見て、図書プロジェクトの経験が生きている事を実感しました。各学校でのPC基礎授業の上級クラス編をここで開設できたらいいし、学校図書室にはないような専門書も借りに来れる地域図書館の役割を果たせる場所として充実・発展していってくれると良いなあと思いました。日本で寄付協力者の皆さんが届けて下さる専門書的なものは、今後はこのリソースセンター用として分類することも検討したいと思います。

（大友）

Page Top ▲

2017-9-3　南アフリカ

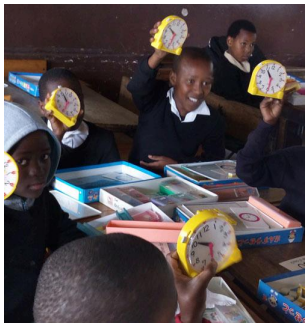
2017年8月（12日～20日）現地プロジェクト訪問報告
その1　算数セット授業

8月12日から20日まで、久我さんと大友で現地プロジェクト視察訪問を行ってきました。

久我さんは、JICA草の根技術支援事業「有機農業塾を拠点とした農村作り」の視察を担当し、私は日本NGO連携無償資金協力事業の「ウムズンベ自治区の学生の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得（第2年次）」の方を担当いたしました。

2014年3月以来、3年半ぶりの現地訪問で、とにかくうれしかったのは、3年前ルテューリ高校の図書委員会活動を引っ張っていた3年生、2015年からTAAA図書プロジェクト現地スタフとして大活躍のモンドリ・チリザさんと学校回りができたことでした。 彼の図書委員会指導の場面に立ち会えなかったのは残念でしたが、回った小学校での低学年対象の彼の算数セット授業には魅了されました。

該当校に到着し、職員に挨拶を済ませた彼が算数セットの収納倉庫に向かうと、上級学年の生徒3～4人がほぼ自発的にかけ出てきて、その倉庫から授業対象の下級生の1クラス分のセットを教室へ運んでくれたのです。算数セットがクラスに行き渡ると、モンドリ指導員は時間を惜しむように、すぐにその日使うプレート（数の勘定に使う磁気付「すうずブロック」が張り付く薄い金属板）とブロックの入った箱を高く掲げるように指示しました。全員が用意できたことを確認すると、“Two + two”と3度ぐらい大声で繰り返し、教室中を回り、2個ずつ2箇所に並べてある事が確認できると“two +two is ?”とクラスに投げかけ、生徒各自が自分のプレートのブロックを触りながら、“one, two, three, four”と声を出して数えるのを見届け、ついてこれていない子には、みんなに数えて聞かせるように促し、全員ができるようになるまで、“two + two is?”(モンドリ指導員)、“one, two, three, four”（生徒全員）が繰り返されるのでした。一つの足し算作業なりが終わる度に、次の作業のためにプレートが空になっていることを確認するために全員にプレートを挙げさせ、それがつぎの作業へ進むぞという合図になっていました。全員の動きを視野に入れ、子ども達が数かぞえに集中できるように、余計なことは言わずに淡々と進めながら、遅れがちな子への配慮が実に自然、しかも丁寧なのに好感が持てました。



授業の一部を割愛して彼に算数セット指導をさせてくれている本来の担任の対応は、それぞれ個性的で面白かったです。 間違っている子のプレートに手を出して直してしまったり、作業指示に従うのが遅れがちな生徒をしかるような口調でせかす教員もいれば、チーム・ティーチング的な感じで彼の指示出しを繰り返したりする教員がいるかと思えば、全く手出しせず、教室の後ろで自分の仕事を黙々とやっているかと思っていたら見学中の私と目があって「彼やってくれるでしょう！」と言わんばかりにウインクしたりと多様でした。そんな年上の担任たちとのいかなる場面にも上手に対応していたモンドリー指導員の柔軟性が心地よく、生徒としても同僚としても彼のような指導者はいいなあと思える有意義な体験となりました。

算数セット一クラス分は支援対象校すべてには行き渡っていないので、一クラス分のセットを渡せていない学校での授業の場合は、モンドリさんが、TAAAのオフィスから一クラス分を車に乗せて持参していました。授業で有効活用され始めているこの算数セットは、英語図書とちがっていずれ現地調達へと引き継いでいってもらえるものではないので、日本で眠っているものをこの1年ぐらいでできるだけ集めて、支援対象各校の倉庫に一クラス分が収納され、いつでも授業で活用できるようにできたらと思います。

（大友）

Page Top ▲

2017-7-29　日本

7月15日TAAA講演会レポート

２０１７年７月１５日（土）、市ヶ谷の「ＪＩＣＡ地球ひろば」でＴＡＡＡ講演会が開催されました。 日差しが厳しい中、初めての方も含め、１７名の方に参加いただきました。２時間という限られた時間の中、 内容は、久我さん（代表）による挨拶、平林さん（南アフリカ事務所代表）による菜園支援活動事業の報告、津山カヤさんによる現地ボランティア報告、 平林さんによる学校図書支援活動事業の報告、質疑応答と自己紹介という流れで行い、盛りだくさんでしたがアットホームな雰囲気の会となりました。

菜園支援活動事業は「ＪＩＣＡ草の根技術協力事業」として実施していますが、 現在のプロジェクトははからずもこの日でちょうど１年の節目を迎えました。 ２月には農業塾の開校式典を行い、講義室・図書室などからなるリソースセンターも立ち上がりました。 また、トレーニングコースが開催され、今までに過去４回実施し、６４名の卒業者を輩出しています。 学校の生徒たちがこのコースを選択することで、自信をつけたり、就職など次のステップにつながっているようです。 活動全般については、自主的に継続するところが出てくるとともに、保育園での活動など新たな取り組みという広がりも出てきています。

学校図書支援活動事業は「外務省　日本ＮＧＯ連携無償資金協力」、「ひろしま・祈りの石国際協力交流財団」の支援を受けて３０校にて実施しています。 同じ本がたくさんある場合はまとめておき、学校訪問の際に持っていくことで、１人１冊ずつ貸し出し、一緒に授業を行うことが可能となっています。 また、本に加えて算数セットも好評で、メーカー別にして配付しています。先生と使い方について検討するとともに、 州教育省にもアドバイスをもらっています。さらに、ＩＣＴの

支援も順調で、１校あたり約２台（１台は生徒用、もう１台は指導者用）のＰＣを設置して進めています。

平林さんの講演の間に行われた津山カヤさんの報告は大変コンパクトにまとまっており、平林さんとはまた異なる視点での感想・報告になっていました。図書については かなりの本が届けられている一方、整理整頓など運営には学校によって課題があること、サッカーを通じて言葉の壁を越えたつながりを持つことができ、運動する大切さ も理解できることなど、示唆に富むものでした。

講演会は今後も毎年定期的に開催していく予定です。ご来場いただいた皆さま、ありがとうございました。今回予定が合わなかった方も、次回お会いできることを楽しみ にしております。今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

（丸岡）

Page Top ▲

2017-7-20　南アフリカ

南アフリカでTAAAのボランティア活動に参加して得たこと

私は、2017年2月に「トビタテ！留学JAPAN高校生」の国際ボランティアで、南アフリカに行き、3週間TAAAの活動に参加しました。それはこれまで自分が知らなかった南アフリカの農村地域の現実を知り、TAAAのスタッフや学校の先生・生徒とかけがえのない時間を持つことができた経験でした。そして、日本と南アフリカのつながりを知り、その両方にルーツを持つ私には、本当にうれしいことでした。長年にわたり、たくさんの人の努力で築いてきた信頼関係の深さを感じました。

TAAAでは、日本から届いたたくさんの本、サッカーボール、ユニフォームを整理し、学校に届けることをしました。TAAAスタッフのモンドレさんと毎日3～5校の学校を回り、「ブックボックス」を届け、図書室の様子を調べました。それらの学校は、自分が知っている日本やジョハネスバーグの学校のように設備が整っているわけではありませんが、先生と話したり、図書室をみて、子どもたちのために学校をよくしようとどれほどみんながんばっているかがわかりました。その一方で本の数が足りないという問題もまだ大きいようでした。

東京で浅見さんと一緒に受け取りに行ったアメリカンスクールの本も、無事に学校に届けられ、本だけでなく、本を大事にする両方の気持ちがつながっていることを感じました。本を読み自分を高めていこうとする子どもたちもたくさんいて、自分が学ぶことも多くありました。

私は南アフリカで生まれ、10歳までジョハネスバーグに住んでいました。その後、日本に来て、東京の公立学校に通い、今年3月に高校を卒業しました。ジョハネスバーグと東京も大きな違いがありますが、ジョハネスバーグとTAAAの活動する地域は同じ国でも全く違っていて、アパルトヘイトがあったことの影響が残っていることや、勉強やスポーツをする環境の格差の深刻さを目の当たりにしたことのショックは大きかったです。

サッカープログラムでは、まず全部のボールに空気を入れ、ユニフォームを整理し、トレーニングの内容を考えました。サッカーは私も大好きで、ずっとプレーしてきたので、とても楽しみにしていたのですが、思っていた以上に楽しく充実した時間でした。子どもたちの話すのはズールー語なのでわからないこともありましたが、サッカーをやっている時は言葉の壁も感じず、あっという間に時間が過ぎていきました。サッカーをするような平らな場所がなく、でこぼこの斜面でサッカーを している学校もありました。そして、そのように劣悪のコンディションでも、みんなが一生懸命練習し、うまいです。何より本当にサッカーが好きで、みんな生き生きとプレーしていました。他にスポーツ施設や道具もない地域で、サッカーの果たす役割は、日本で考えるよりずっと大きいです。ボールやユニフォームがまだまだ足りないので、これからも日本で集めて、支援していければと思います。練習メニューを教えたり、一緒にプレーしたことは自分にとってとても貴重な経験でした。

また、ダーバンで、サンディレさんが活動しているNGOで、「ストレートチルドレンではなくサーファーだ！」の活動にも参加し、サーフィンの大会の準備をしたり、子どもたちの練習を手伝ったりしました。そこでは、また全く違った子どもたちがおかれている現実に気づかされ、その子どもたちのための活動の大切さを知りました。

今回のボランティアを通して、平林さんやモンドレさん、他のTAAAのスタッフの方たち、サンディレさんや仲間の人たちが活動する姿をみて、一緒に行動し、いろいろなことを話せたことは、南アフリカのことを理解したり、これから自分がどう生きていくかを考える上でも、本当にたくさんのことを得ることができました。この機会を与えてもらえたことに感謝し、南アフリカと日本の両方にルーツを持つ自分として、これからも自分のできることを考え、行動していきたいと思いま

す。日本では、AJFのアフリカンキッズクラブでも活動し、アフリカにルーツを持ち日本に住む子どもたちのためにイベントを行ったり、自分たちの気持ちを発信したりしています。その活動の中でも、今回のボランティアの経験について話し、他の子たちにも自分がルーツを持つ国に行くことを勧めたいと思います。その国の人々と過ごし、社会や生活を知ることで、自分のもう一つのルーツを理解し、好きになり、自分にもっと自信が持てると思います。

（津山家野）

Page Top ▲

2017-5-31　南アフリカ

地元文化を醸し出す生徒たちの図書活動

2016年度の学校図書支援活動を振り返ると、教師の異動や図書室のスペース不足によって活動が停滞した学校もありましたが、「全体的に生徒主導の図書委員活動がしっかり根付き、それぞれの学校のやり方で発展してきた年度だったな」という実感があります。　ほとんどの学校に図書室や図書コーナーができ図書環境が整ったことや、校長、先生、生徒と学校全体で学校図書の大切さを認識してきたことが、委員会生徒たちのイキイキとした活動を後押ししたのだと思います。

ジュニアプライマリ以外の多くの学校では、図書委員会生徒たちが、朝会や休み時間に全校生徒へ本の紹介や本の読み聞かせを行うようになりました。　特に高校での図書委員会生徒たちのリーダーシップは頼もしく、たとえ司書教師が不在や多忙でも、またはやる気が足りなくても、図書委員会生徒たちだけで活動が継続できるようになりました。なかには、ディベートやプレゼンテーションなどのアクティビティを生徒たちが自主的に企画した高校や、「今後は生徒対象の司書研修をしてください」と司書教師から依頼があった高校もありました。

昨年度末に対象校30校（プライマリ16校、セカンダリ・高校14校）の司書教師にアンケート調査を行いました。アンケート項目の一つが「図書委員会生徒の役割と活動内容」でしたが、回答をみると、本の貸し出しや図書室の整理整頓などの管理・運営活動だけでなく、他の生徒に積極的に読書を推奨したり、積極的に音読やリーディングコンテストなどのアクティビティをしている学校が多いことが分かりました。

特にアクティビティのなかに、ドラマ、ストーリーテリング、クイズなど、地元の伝統文化や娯楽文化を取り入れた活動があったのが印象的でした。日常生活のなかに歌や踊りがある地域です。私自身、生徒たちの図書活動の成果発表を何回も披露してもらったことがありますが、小学校低学年の音読も棒読みではなく、引きつけられるジェスチャーをまじえたリズム感あふれるものだったり、歌やドラマ仕立てで一冊の本を皆で暗誦したりと、学校視察ではなく、「ここは劇場かしら」と錯覚に陥ることがしばしばありました。

生徒たちの活動が浸透するにつれて、自然と地元の豊かな文化が学校図書活動に反映されてきているような気がします。もしかしたら、この地域独自の学校図書文化が育まれる過程にいるのかもし

れません。このプロセスはとても興味深く、大切にしていきたいと思います。

（久我）

Page Top ▲

2017-4-29　南アフリカ

先行プロジェクト卒業生菜園グループと繋がって

2016年１月に終了した先行プロジェクト（JICA草の根技術協力事業「学校を拠点とした有機農業促進モデル地域作り」）では４０校の学校菜園の他に4つの卒業生菜園グループを支援してきました。3月の視察訪問で私が一番嬉しかったことは、４つの卒業生グループを訪問し、すべてのグループが活動を継続していることを確認できたことです。彼らが自立して有機農業を続けていることは、対象地域における有機農業の可能性を物語っているといえるでしょう。

仲良しの若い女性たちが率いるトゥルベケ小卒業生グループは、各自家庭菜園をしながら、小学校敷地内のグループ菜園も地道に継続し、地元住民や青空マーケットで余剰作物を販売しています。

インプレメロ・グループはそれぞれの家庭で畑作りをし、リーダーのロンディは地域内で販売も行っています。沿岸地域で土壌があまりよくないため、換金用の作物は、タマネギとホウレン草に特化していました。　インプレメロ小学校の卒業生であるロンディは3人の子のシングルマザーで、畑仕事の他はほとんど仕事をしていません。「野菜の売り上げは生活にとても役に立っている」といいますが、比較的都心に近いこの地域の問題は、牛糞不足です。彼女の菜園を訪れるやいなや、TAAA菜園スタッフのボングムーサは早速畑の状態を確認しアドバイスを行いました。　ロンディからは、美味しいサツマイモをお土産に頂きました。

ロゼッタンヴィル・グループは、様々な理由で一度活動が途絶えましたが、今年の1月に再開していました。「子ども達にいいものを残したい」を強調するリーダーのワイズマンは、地元の給食配給業者に健康によい安心な有機野菜を卸すことを目指しています。

活動、販売量ともにダントツなのは、なんといってもムタルメ・グループです。ムタルメ小学校敷地内で、一人畑を守ってきたリーダーのンギディ氏は、今は農業塾内で自分自身の畑作りの他に、コース参加生徒への指導も行い、現行プロジェクトでも大活躍をしています。また、青空市場やクリニックなどで精力的な販売活動も行い、地元では野菜作りの有名人になっていました。　年金支給日にできる青空マーケットでは、少し前までは、缶詰など保存食がほとんどだったのですが、ンギディ氏の影響もあり、今でも新鮮な野菜や果物も並ぶようになりました。

地元でイキイキと自活生活をしている大人が圧倒的に少ない対象地域では、ンギディ氏をはじめ卒業生グループたちは、失業中の若者たちに希望を与える大きな存在になりつつあります。 ４つのグループすべては、今年度に有機農業塾で始まる上級コースへの参加を希望していますが、これからも彼らとしっかりと繋がっていくことが、人を育てながら農村作りを目指す現行プロジェクトの根

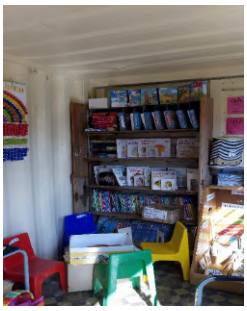
付きに繋がるのだと、改めて思いました。

（久我）

Page Top ▲

2017-3-29　南アフリカ

バンギビーゾ小学校訪問



3月10日～18日まで、現地のプロジェクト・サイトを訪問しました。今回の訪問の主目的は、JICA草の根技術協力事業「有機農業塾を拠点とした農村作り」の進捗状況のモニタリングでしたが、図書事業対象校のバンギビーゾ小学校にも訪問する機会がありました。

有能な司書教師であるザマ先生のがんばりで、活発な図書活動をしていたバンギビーゾ小学校ですが、新入生が増え続けた結果、深刻なスペース不足となり図書室として使っていた部屋を教室として使うことになり、図書室がなくなってしまました。　このため、昨年の春、（一財）ひろしま・祈りの石国際教育交流財団様から助成金をいただき、コンテナ図書室を寄贈しました。

小学校の敷地に入ると、すぐ目についたのは、そのコンテナ図書室でした。休み時間に生徒達が時間に自由に出入りできるように、ドアが開いていました。「学校の中心は図書室」といった存在感です。

中に入ると、小学生が魅了されるようなステキなデザインが施されていました。
本棚の上には日本からの算数セットが置かれていました。　子供たちが座って本が読めるように、椅子とテーブルのコーナーもあります。

現地図書スタッフのモンドリと一緒に、改めて算数セットの使い方を先生たちに詳しく説明しました。 南アの学校では、小学校4年からすべての教科が英語で行われます。それまでに英語と算数がついていけてないと、ここで大きくつまずいてしまいます。実際にそういう生徒がとても多く、小学校の先生たちは頭をかかえています。
日本で多くの方々から中古の算数セットを寄付していただいているお陰で、この小学校には3年生の算数の授業で、一人一人に算数セットを配ることできるようになりました。基礎的な計算力を身につける上で画期的なツールとなるでしょう。

先生たちとのミーティングが終わると、数人の生徒たちが部屋に入ってきて、音読を披露してくれました。大勢の聴衆の前に立つ舞台俳優のように、大きな響く声で正々堂々とした発表ぶりです。「バンギビーゾ小出身の生徒は、上級生より英語力がある」と、進学先の高校の先生がいっていましたが、それを裏付けるかのような音読発表でした。
私達は、大勢の聴衆になったつもりで、先生たちにも生徒たちにも惜しみない拍手を贈りました。

（久我）

Page Top ▲

2017-2-27　南アフリカ

有機農業塾の開校式典

2016年7月にJICA草の根技術協力事業として開設した有機農業塾は、２回の基礎コースが終わり、４１名の卒業生を輩出し、現在３回目のコースが行われて１８名が受講中です。

この度、JICA東京国際センターの佐々木所長と服部氏が事業モニタリング調査としてプロジェクトサイトを訪問していただき、ご訪問中の2月14日に、有機農業塾の開校式典を行いました。
当日はコロコロ地域のインコシ（チーフ）であるンザマ氏、各地区のリーダーであるインドゥナ各氏が参加くださり、また、カウンターパート団体である州経済開発・観光・環境省、州教育省、州農業省の代表者、および地域NGOウルドのメンバーの出席があり、それぞれ事業への感謝と協力を表明しました。
また、ゲストスピーカーとして、有機農業指導者であり、エナレニ農場経営のリチャード・ヘイグ氏が激励の言葉をくれました。

日本側からはJICA東京国際センターの佐々木所長と服部氏、JICA南アフリカ事務所の木野本所長と水野氏、在南ア日本大使館から菱沼書記官が出席くださり、参加者へのあたたかいメッセージをいただきました。　菱沼書記官のズールー語でのスピーチには、出席者はみな感動していました。

最後にTAAAからプロジェクトマネージャーの平林が出席してくださった方々への感謝の辞を述べました。式典の途中、ムタルメ小学校およびムタルメ高校の生徒が歌や踊りを披露。また、州教育省ムタルメ学区マネージャーのクル氏からTAAAおよびJICAへの感謝状が授与されました。式典終了後、校舎の壁に設置したプレートの除幕式を行いました。
現地のカウンターパートとスタッフが短期間で力を合わせて準備をし、また、ゲストの皆さまからたくさんのあたたかいメッセージをいただいたお陰で、式典は盛会に終わりました。

皆さまが大変お忙しい中、遠くから開校式に出席くださったことは、カウンターパート団体関係者、地域住民、農業塾卒業生や受講生、TAAAスタッフにとって大きなモチベーションとなりました。ありがとうございました。

（TAAA南ア事務所　平林薫）

2017-01-15　南アフリカ

保育園で菜園活動が始まりました

昨年の7月から始まったJICA草の根技術協力事業「有機農村塾を拠点とした農村作り」では、地元の5カ所の保育園も指導対象にしています。
昨年秋に、基本的な農具、種、苗を配布し、それぞれの園内に小さな菜園ができました。

園児たちは、土壌作りから関わりました。小さな手で農具を持ち、一生懸命やりました。やさしいTAAAの指導員のお兄さんと保育園の先生たちに支えられて、種まきや水やりが上手になってきています。
「僕にも種ちょうだい」「どんな野菜ができるのかな」毎日ワクワクしながら楽しく学んでいます。

先行の学校菜園プロジェクトでは、小学校で菜園活動にかかわってきた生徒が、中学校や高校で継続して菜園活動を行い、実力を発揮する姿が見られました。
彼ら「菜園男子」「菜園女子」たちは、学校の菜園委員会を盛り上げるだけでなく、家に帰れば家庭菜園も始めて、お母さんやおばあさん、近所のおじさんやおばさんに有機農業を紹介するなど、プロジェクトリーダー的存在になっていきました。
このような菜園生徒の一部は、卒業後、有機農業を将来の仕事として真剣に考え、現在、有機農業塾“MATS”で菜園技術と知識を高めています。

その一方で、今まで土いじりをしたことがなく高校生になって初めて菜園活動を始めた生徒のなかには、最後まで農業になじめず積極的に取り組まなかった生徒もいました。

「畑仕事は男がやるものではない」「家庭菜園はおばあちゃんの仕事」と、小規模な農業に関して偏見やネガティブなイメージが残っているこの地域では、固定観念のない年少児の頃から、男の子と女の子が一緒に土地いじりに馴染ませて楽しみながら菜園活動を行うことが大切です。また、幼児の栄養改善の面からも保育園での野菜作りはとても有意義です。

自由時間の多い保育園は、楽しく菜園活動をする時間がたっぷりあります。菜園で遊びながら、たくさん学んでたくさん栄養も採っていってほしいです。かれら小さな菜園男子・女子たちが卒園して小学生になったら、地元の学校菜園をどんどん盛り上げていってくれることでしょう。そう願っています。

(平林、久我)